【研究ノート】

F. Scott Fitzgerald の作品における人種表象

高　橋　美知子

はじめに

「ヨクナパトーファ・サーガ」でアメリカ南部における人種問題に深く切り込んでいったウィリアム・フォークナー（William Faulkner）と比べれば、彼と同時代に生きたスコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald）の作品が人種問題と結び付けられて語られることは圧倒的に少ない。彼の妻ゼルダ（Zelda）は深南部と呼ばれるアラバマ州の出身であるし、南部を舞台にした短編も発表しているものの、彼が人種問題を作品の主題として取り上げることはなかったからである。だが、彼は決して人種問題に無関心だったわけではない。移民排斥の嵐の吹き荒れる時期のアメリカでアイルランド系カトリックとして育ち、20 世紀前半を生きた彼が人種問題に無頓着でいられたはずがなく、注意深く観察すれば彼の作品から様々な人種表象が浮かび上がってくる。人種の観点からフィッツジェラルドの作品を分析した近年の論文としては、スザンヌ・デル・ギッツォ（Suzanne del Gizzo）の “Ethnic Stereotyping”（2013）やクリス・メッセンジャー（Chris Messenger）の “Out Upon the Mongolian Plain”（2007）があげられる。前者は時系列に沿ってフィッツジェラルドの作品に現れる人種問題の描写を概観しつつその変遷を分析した論文であり、後者は *Tender Is the Night*（1934　以下 *TITN*）において、ともにアメリカ出身の白人である主要女性登場人物 3 名―ニコル・ウォレン・ダイヴァー（Nicole Warren Diver）、ローズマリー・ホイト（Rosemary Hoyt）、メアリー・エイブ・ミンゲッティ（Mary Abe Minghetti）―が作品の終盤では全員、ダークな肌の色を持つ男性と結ばれていることに注目し、人種描写と作品の主題の関連を詳細に分析している。この論文が明らかにしているのは、フィッツジェラルドが *TITN* を構成する上で人種という要素を強く意識していたという点である。

本研究の最終目的は、*The Great Gatsby*（1925 以下 *GG*）から *TITN* に至る間に、フィッツジェラルドの人種意識がどのように変化していったかを、この二作品の間に発表された短編群の中に探り、明らかにすることである。本研究ノートではその前段階として、彼の人種観に影響を与えたと思われる生い立ちに関する事項、20 世紀初頭アメリカにおける人種問題をめぐる歴史的・社会的背景、そして先行研究を踏まえ *GG* と *TITN* における人種描写の違いをまとめた上で、フィッツジェラルド自身の人種意識について考察したい。

1. フィッツジェラルドの生い立ち [1]

スコット・フィッツジェラルドは 1896 年 9 月 24 日、ミネソタ（Minnesota）州のセント・ポール（St. Paul）に生まれた。父親のエドワード（Edward）は仕事に行き詰りつつある家具職人であり、母親のモリー（Mollie）は実業家であるマッキラン（McQuillan）家の出身であった。エドワードはアイルランドとイングランドの血を引いており、モリーはアイルランド系で、両者ともカトリック教徒であった。スコットの名は、父の遠縁にあたるメリーランド（Maryland）出身のフランシス・スコット・キー（Francis Scott Key）にちなんでつけられた。スコット家とキー家は 17 世紀にそのルーツを遡ることのできる名門であり、フランシス・スコット・キーはアメリカ国歌「星条旗（The Star-Spangled Banner）」の作詞者として有名である [2]。

スコットの誕生から 2 年後にエドワードは家具職人の仕事を失い、家族はニューヨーク（New York）州に引越し、エドワードはプロクター・アンド・ギャンブル（Procter and Gamble）社で働きはじめた。以後一家は 1908 年にエドワードが解雇されるまで、シラキュース（Syracuse）やバッファロー（Buffalo）に住んだ。後年フィッツジ

[1] このセクションの執筆には、主に以下の研究書を参考とした。Bruccoli, *F. Scott Fitzgerald: A Life in Letters*、*Bruccoli, Some Sort of Epic Grandeur*、Curnutt, *The Cambridge Introduction to F. Scott Fitzgerald*、Tate, *F. Scott Fitzgerald A to Z*。
[2] ただし、彼が 1814 年に詞を書いた「星条旗」が国歌として法制化されたのは 1931 年になってからである。

ェラルドはP&G社を解雇された時の父親を振り返り、「彼はその後の人生ずっと惨敗者だった（He was a failure the rest of his days）」と述べている（Turnbull 17）。彼はまた母親を評して「神経症的で、病的に心配ごとばかり抱えていて半分正気を失っていた（a neurotic, half insane with pathological worry）」と書き残しているが（Bruccoli *Letters* 138）、その上「成り上がり者のアッパーミドルクラス独特の気の利かなさを体現した（represented the gaucheries of the upper-middle-class parvenu）」人物でもあったようである（Curnutt *Introduction* 13）。息子の誕生直前に二人の娘を相次いで亡くしていたモリーは、フィッツジェラルドを非常に甘やかしたが、彼の執筆活動には厳しく反対していた。エドワードの失業後、一家はセント・ポールに戻りマッキラン家の経済的援助を受けつつ暮らすことになる。セント・ポールで一家は高級住宅地のサミット・アヴェニュー（Summit Avenue）に住んだ。裕福な遊び友達に囲まれつつも友人たちとの経済格差を敏感に感じ取っていたフィッツジェラルドは、その結果「一生消えることのない劣等感（a life-long inferiority complex）」を抱くこととなった（Curnutt *Introduction* 14）。

フィッツジェラルドが少年期に通った学校は全てカトリック系であった。ニューヨーク時代に聖天使（St. Angels Convent）とナーディン（Nardin Academy）の二つの学校に通い、セント・ポールではセント・ポール・アカデミー（St. Paul Academy）に入学した。しかし成績は芳しくなく、心配した両親により1911年にニュージャージー（New Jersey）州にある寄宿学校、ニューマン・スクール（Newman School）に転校させられた。ここで彼はシガニー・フェイ神父（Father Sigourney Webster Fay）に出会う。フェイ神父はフィッツジェラルドの文学的才能を見出し、彼に本格的な創作活動への扉を開かせた人物である。1913年、フィッツジェラルドはプリンストン大学（Princeton University）に入学する。ここで彼はのちに20世紀アメリカを代表する文芸批評家となるエドマンド・ウィルソン（Edmund Wilson）と出会い、親交を深める。当時のプリンストン大学には、他にジョン・ピール・ビショップ（John Peale Bishop）やグレンウェイ・ウェスコット（Glenway Scott）らも在籍していた。大学入学直後はフットボールのスターを目指したフィッツジェラルドであるが、体格にも体力にも恵まれていなかった彼はすぐにその夢をあきらめざるを得なかった。その後彼は執筆活動に情熱を注いでいく。

ウィルソンとフィッツジェラルドは文学への情熱に結ばれた友情を形成していくが、フィッツジェラルドに生涯影響を与えた大学時代のもう一つの出会いはジネヴラ・キング（Genevra King）とのそれであった。イリノイ（Ilinois）州レイク・フォレスト（Lake Forest）出身のジネヴラはセント・ポールの社交界でも有名な女性で、フィッツジェラルドはこの少女に夢中になった。しかし、二人の関係は短期間に終わる。フィッツジェラルドはジネヴラの自宅で、誰かが「貧しい男は金持ちの女との結婚を考えるべきじゃない（Poor boys shouldn't think of marrying rich girls）」と話すのを耳にしたと書き記しているが（qtd. in Curnutt *Introduction* 16）、これは彼の作品に繰り返し現れる主題となり、ジネヴラは彼の描くヒロインたちの原型となったのである。

大学で意欲的に執筆活動を行った一方で、学業には身を入れていなかったフィッツジェラルドは、成績不振のまま1917年に陸軍入隊のため大学を退学した。彼はヨーロッパ戦線に加わることのないまま、アラバマ（Alabama）州モンゴメリー（Montgomery）のキャンプ・シェリダン（Camp Sheridan）で終戦を迎えたが、この町で彼は将来の妻となるゼルダ・セイヤー（Zelda Sayer）と恋に落ちた。戦後、ニューヨークでコピーライターになったフィッツジェラルドの生活力に不安を覚えたゼルダにいったんは婚約を解消されるが、1920年に発表した *This Side of Paradise*（以下 *TSOP*）の成功により彼女の心を取り戻すとともに、彼は作家としてのスタートを華々しく切ることになる。二人は1920年4月に結婚し、容姿端麗で派手好きのスコットとゼルダは「狂騒の20年代」のアイコンとなっていく。

このようにフィッツジェラルドの生い立ちを振り返っていくと、いくつかの特徴が浮かび上がってくる。一つは家族を養う力がなく影の薄かった父親と、風変わりで息子を溺愛した母親という些かいびつな家族像である。二つ目はセント・ポール時代、そしてプリンストン時代を通じて培われた階級意識である。フィッツジェラルドの抱いた階級意識とは、決して自らが特権階級に属しているという優越感ではなく、むしろ特権階級と自分との間に厳然と存在する壁そのものであった。この意識を抜きにして、彼の文学を語ることは不可能である。三つ目は、カトリシズムの影響である。フィッツジェラルドは決して敬虔なカトリック教徒ではなかったし、事実、バルチモア大司教区（the Archdiocese of Baltimore）はフィッツジェラルドの死後、彼がカトリック教徒としての人生を送っていないとして、フィッツジェラルドの家族が眠るセント・メアリー墓地（St. Mary Cemetery）への埋葬を許可しなかった[3]。だが、カトリック教徒の両親のもとで育ち、一貫してカトリック系の学校で教育を受けたフィッツジェラルドの作品にさまざまなカトリシズムの影響が見て取れることは、古くはアンドリュー・ター

[3] 娘のスコッティー・フィッツジェラルド・スミス（Scottie Fitzgerald Smith）の働きかけにより、フィッツジェラルドとゼルダの遺体は1975年にセント・メアリー墓地に埋葬されることができた。

ンブル（Andrew Turnbull）、近年ではスティーヴン・フライ（Steven Frye）らの研究で指摘されている。20 世紀前半のアメリカでは人種的・文化的にマイノリティに分類されるアイルランド系カトリックの文化の中で成長したことが、フィッツジェラルドの人種観にどのような影響を与えたかについては、今後研究を進めていきたい。

2. 20 世紀初頭のアメリカにおける歴史的・社会的背景

アイルランド系カトリックとしての出自がフィッツジェラルドに与えたかを考察するには、当時のアメリカにおける歴史的・社会的背景を理解しておく必要がある。1890 年にフロンティアの消滅が宣言されると同時に、アメリカは世界一の工業国の地位に躍り出た。資本主義の発展に伴って移民は安価な労働力として 19 世紀の終わりごろまでは歓迎されたが、白人労働者たちは次第に安い賃金で働く移民を不当な競争相手と見なす様になる。その結果、1882 年の「中国人排斥法」の成立を皮切りに、移民排斥運動（Nativism/Anti-Immigrant Movement）に拍車がかかっていった（笹田 72）。

アメリカの移民排斥運動の歴史は独立以前にまでさかのぼるが、アイルランド系カトリックは常にその対象とされていた。ジョン・トレイシー・エリス（John Tracy Ellis）が *American Catholicism*（1969）に記した「1607 年、反カソリックという普遍的な偏見がジェイムスタウンにもたらされ、マサチューセッツからジョージアに至る 13 の植民地全てにおいて熱心に広まり、発展していった（a universal anti-Catholic bias was brought to Jamestown in 1607 and vigilantly cultivated in all the thirteen colonies from Massachusetts to Georgia）」という一文は、アメリカにおけるカトリシズムを論じるときしばしば引用されるが、それはアメリカにおける反カトリック精神の根深さを端的に表しているからであろう（19）。特に 19 世紀半ばには、アイルランド系とドイツ系のカトリック移民の増加に伴い、排斥運動が活発化した。カトリシズムは、アメリカの共和制に対する脅威とみなされ始めたのである。プロテスタントの指導者ライマン・ビーチャー（Lyman Beecher）は *Plea for the West*（1835）の中で「カトリックのシステムは自由とは相容れぬものであり、多くの聖職者は後援や保護を求め、われわれの政府に反対する立場の外国人たちに頼っている（The Catholic system is adverse to liberty, and the clergy to a great extent are dependent on foreigners opposed to the principles of our government, for patronage and support）」と説き、西部からカトリック教徒を排斥するよう訴えた（61）[4]。加熱するカトリック排斥運動は、カトリック施設の焼き打ちや信者への暴行、殺人さえ引き起こしていく。1854 年には特にアイルランド系カトリックを敵対視し、公職からの追放を目指した排斥主義のアメリカ党（the American Party）が結党され一時勢力を伸ばした（笹田 76）。興味深いのは、アイルランド系カトリック排斥運動に加わった者たちの中には、アイルランド系プロテスタントもいたという点である。つまりアイルランド系カトリックは出身国と宗教との二重の理由において差別されていたことになる。

1920 年代はクー・クラックス・クラン（Ku Klux Klan）を中心に再び反カトリシズムの動きが活発化した時期である。アメリカではドイツに先駆け 20 世紀のごく始めから、人類の遺伝的素質を改善することを目的とし、悪質の遺伝形質を淘汰し、優良なものを保存することを目的とする学問である優生学に基づいた優生政策が始まっていたが、1920 年代には「北方人種」の人種的優位性を説くノルディシズム（Nordicism）という概念が隆盛していた。優生学者であるマディソン・グラント（Madison Grant）の著書 *The Passing of The Great Race*（1916）は部数を大いに伸ばしたわけではなかったが、1920 年代のアメリカでは彼の主張は影響力を持って受け入れられた。*GG* においてトム・ビュキャナン（Tom Buchanan）が言及する「ゴッダードという奴が書いた『有色帝国の勃興』（*The Rise of the Colored Empires* by this man Goddard）」はケンブリッジ版 *GG* の注では、ロスロップ・ストッダード（Lothrop Stoddard）の *Tide of Color*（1920）へのアルージョンであるとされているが（14、201）、ゴッダードという名前（Grant + Stoddard）を考えると、フィッツジェラルドはグラントのことも念頭においていたと推測される。グラントは政府の移民政策にも影響を与え、1924 年には「劣等人種」のアメリカへの流入を防ぐことを目的とし、南欧、東欧やロシアからの移民を制限、アジアからの移民は排除し、北欧からの移民を奨励する移民法が議会を通過した（Ciment 203）。この移民法自体はアイルランド系移民を制限する目的を有していたわけではないが、南欧・東欧からの移民への批判とカトリック批判は密接に結びついていた。

このようにフィッツジェラルドが幼少期、青年期を送った 19 世紀末から 20 世紀初頭は、アイルランド系カトリックにとって逆風の強かった時代であった。ただし、彼がこの期間の多くを過ごしたセント・ポールは歴史的にカトリックの影響力の強い地域であり、カーク・カーナット（Kirk Curnutt）によれば当時のセント・ポール住民の大部分はカトリック教徒であった（*Introduction* 14）。しかし後に東部へと移り住んだフィッツジェラル

[4] ライマン・ビーチャーは *Uncle Tom's Cabin*（1852）の著者、ハリエット・ビーチャー・ストウ（Harriet Beecher Stowe）の父である。

ドは、そこで自らの育ったカトリックのコミュニティとWASP 的なアメリカとの間のギャップをまざまざと感じることになったのかもしれない。

3. *The Great Gatsby* と *Tender is the Night* における人種描写

ギッツォは “Ethnic Stereotyping” において初期から未完に終わった *The Love of the Last Tycoon*（1941 以下 *LO/TLT*）に至るまでの作品におけるフィッツジェラルドの—しばしば紋切り型の—人種描写を概観している。まず、最初の二つの長編 *TSOP* と *The Beautiful and Damned*（1922）においては、ユダヤ人をはじめとする新移民の脅威が反映されていること、また初期の短編にはみじめな黒人がしばしば喜劇的要素として描かれていると指摘している（229）。さらに *GG* へと論は進み、「人種や民族の問題に関するフィッツジェラルドの複雑な態度（Fitzgerald’s complex attitudes toward issues of race and ethnicity）」はこの作品に「おそらくもっとも明確に表れている（perhaps most clearly visible）」と述べている（230）。

ギッツォは *GG* においてフィッツジェラルドが「陰に日向に優生学を批判している（explicitly and implicitly critiques eugenics）」と指摘しているが（230）、前述したトム・ビュキャナンによる *The Rise of the Colored Empires* への言及はその最たる例であろう。ストッダードやグラントの著作を意識したと思われるこの本の名を挙げ、トムは嘆いてみせる。「文明は粉々になりつつあるんだぜ（Civilization’s going to pieces）」「つまり、俺たちが十分気をつけておかないと白人はいずれ—いずれ完全にやり込められてしまうってことだ（The idea is if we don’t look out the white race will be—will be utterly submerged）」（14）。自らが北方人種（Nordic）であると強調しながら、トムはここで典型的なノルディシズムを披露しているのだが、とってつけたように優生学の知識を披露するトムの言葉は、友人たちを招いての夕食の場で空虚に響く。この描写だけを一例としてフィッツジェラルドが優生学を批判していたと判断するのは早急かもしれないが、この場面からは彼がどこか距離をおいて優生学を受け止めていたであろうことが透けて見える。

GG において人種を強調して描写されている人物といえば、主人公のジェイ・ギャッツビー（Jay Gatsby）と手を組むユダヤ人ギャング、マイヤー・ウルフシェイム（Meyer Wolfsheim）がいる。彼が初めて語り手ニック（Nick）の前に登場する場面では、その容貌が次のように描かれる。「平べったい鼻をした小柄なユダヤ人が大きな頭をあげて、両方の鼻の穴の中のふさふさした鼻毛でもって僕を見た。少し経ってから、薄暗がりの中に彼の小さな目を見つけることができた（A small, flat-nosed Jew raised his large head and regarded me with two fine growths of hair which luxuriated in either nostril. After a moment I discovered his tiny eyes in the half-darkness）」（55）。「平べったい鼻」と「大きな頭」、「ふさふさした鼻毛」、そして「小さな目」をした「小柄な」この男は、“connection” を “gonnegtion”、“Oxford” を “Oggsford” と発音し、彼がギャッツビーのほうに顔を向ける仕草は「表情豊かな鼻でギャッツビーを覆い隠す（covered Gatsby with his expressive nose）」と描写される（55）。コミカルな効果を狙っているとはいえ、ウルフシェイムがユダヤ人であることを考えれば、非常にステレオタイプ的な描写と言えるだろう。

一方で、ギャッツビーの人種的背景は曖昧にされている。2000 年には、ギャッツビーは白人としてパッシングしている黒人であるというカーライル・V・トンプソン（Carlyle V. Thompson）の主張が論争を呼び起こしたこともあった[5]。また、ミュレー・ボウムガーテン（Murray Baumgarten）は “Seeing Double in the Fiction of F. Scott Fitzgerald, Charles Dickens, Anthony Trollope, and George Eliot”（1996）において、ウルフシェイムはギャッツビーの「ダブル（double）」であり、彼らは「WASPのアメリカというもっと日の当たる世界（the brighter light of WASP America）」に入り込もうとしている「成り上がり者（arriviste）」なのだと論じている（44）。この人種的曖昧性は「『よそ者』によってもたらされる社会的脅威（the social threat posed by “outsiders”）」の表象であると捉えることもでき（Gizzo 230）、この頃のフィッツジェラルドの作品から黒人やユダヤ人に対する偏見が垣間見えることは否めないだろう。

ギッツォは、1930 年代以降のフィッツジェラルドの人種や民族の描写には変化が見られることを指摘している（232）。例えば “Crazy Sunday”（1932）、“The Hotel Child”（1932）などの短編にはステレオタイプの枠組みを超えたユダヤ人登場人物が現れており、*The Love of the Last Tycoon* の主人公モンロー・スター（Monroe Stahr）は実在の伝説的プロデューサー、アーヴィング・タルバーグ（Irving Thalberg）をモデルとしたユダヤ人である。1935 年に友人のアンソニー・ブティッタ（Anthony Buttitta）に宛てて書かれた手紙には「以前はイタリア人が大嫌いだったよ。ユダヤ人もだ。外国人ほとんどといってもいい。他のすべてと同様、僕が間違っていた。今、僕が嫌っているのは自分自身だけだ（I hated Italians once. Jews too. Most foreigners. Mostly my fault like everything else. Now I only hate myself）」と書か

[5] 彼の主張は著書 *The Tragic Black Buck*（2004）に収められた “Jay Gatsby's Passing in F. Scott Fitzgerald's *The Great Gatsby*” としてまとめられている。

れている（qtd. in Margolies 86）。フィッツジェラルドの人種意識は、*GG* からこの手紙が書かれた 1935 年までの約 10 年間で変化したのだろうか。その手掛かりを探って、1934 年に発表された *TITN* における人種表象に目を向けてみたい。

TITN の人種表象に関して注目すべき近年の論文の一つは、前述したクリス・メッセンジャーの "Out Upon the Mongolian Plain" である。この論文においてメッセンジャーは、*TITN* に繰り返し表れる人種的･民族的描写は、ディックが抱える男性としての自信喪失と関係していること、そして白い肌のアメリカ人であるニコル、ローズマリー、メアリーの三人の女性登場人物たちが関係を持つダークな肌の男性たち―トミー・バーバン（Tommy Barban）、ニコテラ（Nicotera）、ホセイン・ミンゲッティ（Hosain Minghetti）―には、ハリウッドで創出されたイメージに影響されたフィッツジェラルドのナイーヴなオリエンタリズムが投影されていると述べている（160）。同時に白人女性たちが白人男性のもとを去りダークな肌の男性に惹かれていくというパターンは、1920 年代の南欧やアジアからの移民に対してアメリカが抱いた不安を変形させたものであることも指摘している（161）。またメッセンジャーは、アフリカ系アメリカ人やアフリカ系ヨーロッパ人に関しては「パロディ的かつ象徴的描写（parodic emblem status）」に留まっており（160）、例えばローズマリーが宿泊していたホテルの部屋で死体となって発見されたジュール・ピーターソン（Jule Peterson）の事件は物語の本当のナラティヴからは隔絶されており、ピーターソンは物語にとっていわば「アクセサリー（accessory）」に過ぎないのだと分析している（170-1）。

以上のことは、次のように整理できる。① *GG*、*TITN* ともにフィッツジェラルドの人種描写は当時のアメリカ社会に蔓延していた人種的ステレオタイプに影響されている。②両作品には 1920 年代のアメリカで隆盛を見た「新移民」への恐怖心や批判を反映していると思われる描写が見受けられる。③その一方で、フィッツジェラルドが優生学に対してはある程度距離を置いて受け止めていたことが推測できる。④ *TITN* においてはトミー・バーバンを筆頭に、ステレオタイプあるいはパロディの範疇を超えたダークな肌を持つ男性が描かれているが、彼らは主人公のディック（白人）の抱える男性としての不安を脅かす象徴としての役割を果たしている。⑤ *GG* から *TITN* の間に書かれた短編などからユダヤ人の描写は非ステレオ大タイプ的に変化していることが見受けられる一方で、アフリカ系の登場人物に関しては、*GG*、*TITN* ともにパロディかつ周縁的存在に留まっている [6]。

GG 以前から *LO/TLT* までのスパンでみると、ユダヤ人や黒人の描写も含めてフィッツジェラルドの人種表象にはかなりの変化が見られる。具体的には、登場人物の人種に基づいたステレオタイプ的・パロディ的描写が徐々に減少していると言えるだろう。*GG* から *TITN* の間に焦点を絞ってみると、両作品の間に見られる人種表象の大きな違いとして、まずトミーという非白人の主要登場人物の存在が挙げられる。*GG* のウルフシェイムも重要登場人物であるが、両者の描かれ方を比較すると、ウルフシェイムが特に人種的側面からは誇張されコミカルな描写をされているのに対し、トミーは主人公ディックの凋落していく姿と対照的に、男性的でたくましい人物として描かれ、彼のハイブリッドな人種や肌の色もその特徴を強調する役割を果たしている。その結果、メッセンジャーが述べるように、白人であるディックの男性性の喪失と、彼の立場を脅かす非白人男性という構図が作中に浮かび上がってくる。*GG* においてニックは「結局これは、西部の物語だったんだ（this has been a story of the West, after all）」と語っているが（137）、*GG* は西部の人間の物語であると同時に、ギャッツビーの人種的曖昧性は残るにしろ、大枠としてはノルディックたちの物語であったと言える [7]。しかし *TITN* には人種の対比が作品の根幹をなす構図として組み込まれているのである。

4. フィッツジェラルドの人種意識

本稿ではここまで、フィッツジェラルドの生い立ち、人種問題をめぐる 20 世紀初頭のアメリカ社会の状況、*GG* と *TITN* に見られる人種描写の違いを概観してきた。今後、*GG* から *TITN* に至る人種描写の変遷を、この間に執筆された短編を手掛かりに探っていくにあたり、フィッツジェラルド自身の人種意識をより明確にする必要がある。彼自身がユダヤ人や黒人などある特定の人種に対してステレオタイプ的な偏見を持っていたのは作中の描写からも明らかで、なおかつブテッィタ宛の手紙に見られるように彼自身が認めるところである。だが、彼自身、ノルディシズムの理論に基づけば人種的に最優位にあるノルディックとして自らを捉えてはいなかったはずである。既に述べたようにアイルランド系もカトリック教徒もアメリカの歴史の中で長い差別にさらされてきたのであり、アイルランド系は 20 世紀初頭までのアメリ

[6] ただし、*LO/TLT* にはスターに影響を与える人物として黒人漁師が登場する。この人物は短編 "Dearly Beloved"（1969）の主人公、ビューティー・ボーイ（Beauty Boy）との関連が指摘されている。また、マシュー・ブルッコリ（Matthew Bruccoli）はこの短編は「フィッツジェラルドが黒人を真面目に取り扱った唯一の短編」と述べている（*Grandeur* 473）。

[7] ニックは *GG* の終盤において "I see now that this has been a story of the West, after all—Tom and Gatsby, Daisy and Jordan and I, were all Westerners, and perhaps we possessed some deficiency in common which made us subtly unadaptable to Eastern life" と語っている（137）。

カでは、伝統的に白人のカテゴリーに属さないとされてきたからである。いわゆる WASP がアイルランド系住民をどのように見ていたかに関して、伊藤章は次のように述べている。

> アイルランド系やイタリア系、ポーランド系などのちに『ホワイト・エスニック』と呼ばれる新しい移民は、アングロ・サクソン系の先住組の目には、かれらと同等のとは見なされなかった（･･･）。悪くて猿同然、良くて黒人と白人の中間的な人種とみなされた。そこで彼らは主流派にもぐりこむためにホワイトネスを獲得する道を選択することにした。（笹田 78-9）

「ホワイト・エスニック」たちのホワイトネスの獲得に関する研究では、彼らが 1920 年代までに黒人やアジア系に対する迫害を通じて「マイノリティ白人」としての勢力を築き上げ、1930 年代には労働者階級のヨーロッパ系移民は中流白人という地位を獲得したとみなされている[8]。つまり、フィッツジェラルドが育った時代はまさにアイルランド系がホワイトネスを獲得するための闘争を行っていたまさにその時期にあたる。彼が黒人やユダヤ人に対して見せる偏見は、アイルランド系住民がおかれたこの立場に影響されていたはずである。

さらに彼の人種意識を複雑にする要因の一つとして、彼が一貫してアイルランド系カトリックのコミュニティの中で育ったにもかかわらず、100％アイルランド系ではなく、父親のサイドを通じてアングロ・サクソン系の血も引いていた点が挙げられるだろう。父親方のスコット家とキー家はアメリカにおける旧家、あるいは名門の家系である。フィッツジェラルドがこのような出自をどのように捉えていたかを知る手がかりを、1933 年に書かれた、友人であり同じくアイルランド系カトリックの出自を持つ小説家ジョン・オハラ（John O'Hara）宛の手紙に見ることができる。

> I am half black Irish and half old American stock with the usual exaggerated ancestral pretensions. The black Irish half of the family had the money and looked down upon the Maryland side of the family who had, and really had, that certain series of reticences (sic) and obligations that go under the poor old shattered word "breeding" (modern form of "inhibitions"). So being born in that atmosphere of crack, wisecrack and countercrack I developed a two-cylinder inferiority complex (Turnbull, *Letters* 503).

まず目を引くのは「黒いアイリッシュ」という表現であるが、これはいわゆる白人のカテゴリーから疎外されてきたアイルランド系の立場を誇張した表現と推測できる。一方で父親側の家系に対しても「よくありがちなように大げさに祖先のことを喧伝している」と冷めた目で見ている。フィッツジェラルドは、母方のマッキラン家を「黒いアイリッシュ」、父方のフィッツジェラルド家を「古いアメリカの血筋」としたうえで、「家族のうち黒いアイリッシュだった半分は金を持っていて、メリーランド側の半分を見下していた」と回顧している。前述したように父親の失業後、フィッツジェラルド家がマッキラン家から経済援助を受けていた事実を踏まえているのであるが、そこに人種を絡めてきていることが興味深い。そのような二つの血筋（を代表する父親と母親）がぶつかり合う環境で育った彼が「二気筒の劣等感（two-cylinder inferiority complex）」を持つようになったという告白から、彼の人種意識の複雑さを読み取ることができる。

母親を「神経症的」、「病的」、「半分正気を失っていた」と評する一方で、父親のことは自らの道徳的基準として敬愛していたフィッツジェラルドであるが[9]、同じ手紙の後半では彼は、「これは僕がゲール人であるという告白なのだと思う。この強烈な社会的自意識に悩まされていないアイルランド人に出会ったことはたくさんあるけれど（I suppose this is just a confession of being a Gael though I have known many Irish who have not been afflicted by this intense social self-consciousness）」と書いており、ここからはフィッツジェラルドが父親側の「アメリカの」血筋よりも母親側の「黒いアイリッシュ」の血筋をより強く意識しており、さらに社会で生きていくうえで、アイルランド系であることの影響をしばしば感じていたであろうことが読み取れる（503）。

自らに流れるアイルランド系とアングロ・サクソン系二つの血筋を意識しつつも、フィッツジェラルドは「ホワイト・エスニック」として、いわゆる「白人」のカテゴリーからは除外されてきたアイルランド系としての自意識をより強く持っていた。ただし、「二気筒の劣等感」という表現からもわかるように、二つの血筋を引くことが、彼の人種意識をより複雑なものにしていたのだと推測できる。

---

[8] 藤川隆男編　『白人とは何か』（2005）第 8 章「アメリカにおける白人の形成」（山田史郎）参照。

[9] 父の死に際して書かれた未完成のエッセイ、"The Death of My Father" でフィッツジェラルドは父について次のように語っている。"I loved my father—always deep in my subconscious I have referred judgments back to him, what he would have thought or done" (qtd. In Curnutt *Historical Guide* 23).

まとめ

以上、フィッツジェラルドの生い立ち、人種問題をめぐる 20 世紀初頭アメリカにおける歴史的・社会的背景、*GG* と *TITN* に見られる人種描写の違い、フィッツジェラルド自身の人種意識についてまとめてきた。*GG* と *TITN* を比較すると、*TITN* では作品の構築において人種という要素がより重要な役割を果たしていることが分かる。先に引用したブティッタ宛の手紙が 1935 年に書かれていることから、*GG* を発表した 1925 年からの 10 年間で、フィッツジェラルドの人種観にはかなりの変化があったことが推測できる。今後は、その変化をより詳細に分析するために、*GG* と *TITN* の間に書かれた短編を題材に、彼の人種表象の変遷を探っていくことを課題としたい。

［参考文献］

Baumgarten, Murray. “Seeing Double in the Fiction of F. Scott Fitzgerald, Charles Dickens, Anthony Trollope, and George Eliot”. *Between“ Race” And Culture: Representations of“ The Jew” in English and American Literature*. Ed. Chyette, Bryan. Stanford: Stanford UP, 1996. 44-61. Print.

Blazek, William, and Laura Rattray, eds. *Twenty-First-Century Readings of Tender Is the Night*. Liverpool: Liverpool UP, 2007. Print.

Bruccoli, Matthew Joseph. *Some Sort of Epic Grandeur : The Life of F. Scott Fitzgerald*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1981. Print.

---, ed. *F. Scott Fitzgerald: A Life in Letters*. New York: Scribner, 1994. Print.

Ciment, James, ed. *Encyclopedia of the Jazz Age : From the End of World War I to the Great Crash vol. 1*. Armonk: Sharpe Reference, 2008. Print.

Curnutt, Kirk, ed. *A Historical Guide to F. Scott Fitzgerald*. Oxford ; New York: Oxford UP, 2004. Print.

---. *The Cambridge Introduction to F. Scott Fitzgerald*. Cambridge: Cambridge UP, 2007. Print.

Ellis, John Tracy. *American Catholicism. The Chicago History of American Civilization*. Chicago: U of Chicago P, 1956. Print.

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1925. Cambridge: Cambridge UP, 1991. Print.

Frye, Steven. “Fitzgerald’s Catholicism Revisited.” *F. Scott Fitzgerald: New Perspectives*. Eds. Bryer, Jackson R., Alan Margolies and Ruth Prigozy. Athens: U of Georgia P, 2000. 63-77. Print.

Gizzo, Suzanne del. “Ethnic Stereotyping.” Bryant 224-32.

Mangum, Bryant, ed. *F. Scott Fitzgerald in Context*. New York: Cambridge UP, 2013. Print.

Margolies, Alan. “The Maturing of F. Scott Fitzgerald.” *Twentieth-Century Literature* 43.1 (1997): 75-93. Print.

Messenger, Chris. “‘Out Upon the Mongolian Plain’:Fitzgerald’s Racial and Ethnic Cross-Identifying in *Tender Is the Night*.” Balzek and Rattray 160-76.

Tate, Mary Jo. *F. Scott Fitzgerald A to Z*. New York: Facts on File, 1998. Print.

Turnbull, Andrew. *Scott Fitzgerald*. New York: Scribner, 1962. Print.

笹田直人他　編　『概説アメリカ文化史』　ミネルヴァ書房　2002

藤川隆男編著『白人とは何か？』刀水書房 2005